



☆目指す学校像☆

誰もが安心して過ごせる学校

☆目指す生徒像☆

自分で考え行動できる生徒

【学校教育目標】

自律・貢献・共生

所沢市立向陽中学校

所沢市向陽町2124 TEL04-2923-7201

令和3年度 第5号

7月2日（金）

教えるということ

校長 沼田 芳行

新型コロナウイルス感染症拡大防止に配慮しながら「withコロナ」で学校の教育活動を進め1年が経過しました。時を同じくして「Society5.0」「知識集約型社会」等、社会の構造的变化は学校にも訪れています。今年から学習指導要領が変わり「社会でよりよく生きていくための資質を多様な経験を通じて身につけていくこと」「子供たちを持続可能な社会の担い手としていくこと」の2つが求められます。



大村はま先生のお話をします。彼女は、明治39年横浜市に生まれ、昭和の初めに大学を卒業、のち長野の女学校で教師のスタートを切った国語の先生です。はま先生の転機となったのは、太平洋戦争が終戦を迎え、新生日本が産声をあげた、新制中学がスタートした昭和20年代です。

あのころ、雨が降って傘をさして授業をしているところなんかが新聞に出ました。みな私の教室でございました。床があるわけなく、ガラスがあるわけなし、本があるわけなし、ノートがあるわけなし、紙はなし、鉛筆はなし、どうするつもりでしょう、そこへ赴任したわけです（東京都江東区立深川第一中学校）。で、1年生は4クラスで、ひとクラス50人でしたが「教室がないからふたクラス100人一緒にやってください」と、こういうわけです。その100人の子どもは1か月以上野放しになっていた子どもたちです。「ウワンウワン」とさわいでいて、どうしようもこうしようもありません。私はあんなに途方にくれたことはありませんでした。しばらくは教室の隅に立ちつくしていました。「静かに！」と言おうと何と言おうとどうなるものでもありません。その時間、私はそばの子どもにだけいろんな話をしながら、ワワワ騒いでいる中を、少しずつ動いて何かを教えたりして、なんとか授業のかっこうをつけていたんです。とても一斉授業なんてできませんから…。

はま先生は大先輩の先生に窮状を訴え「何か策はないか？」と訊ねます。しかし、先輩は「なかなかいい格好じゃないか、経験20年というベテランが教室で立ち往生なんて」そして「そういうときにはほんものになれるんだから、やれるところまでやってみることだね」と取り合ってくれなかつたそうです。はま先生は次のように回想します。

私はその日、疎開の荷物の中から新聞とか雑誌とか、とにかくいろいろなものを引き出し、教材になるものをたくさんつくりました。約百ほどつくりまして、それに一つ一つ違った問題をつけて、ですから百通り教材ができたわけです。翌日それを持って教室へ出ました。そして、そばの子どもからそれを渡しては「これはこうやるのよ、こっちはこんなふうにしてやってごらん」と、一人ずつこなしていったわけです。そうしたら、これはまたどうでしょう、仕事をもらったものから、食いつくように勉強し始めたのです。私はほんとうに驚いてしました。そして、彼等はほんとうに「いかに伸びたかったか」ということ、「いかに何かを求めていたか」ということ…（中略）私は、みんながしーんとなって床の上でじっとうくまつたり、窓わくの所へよりかかったり、壁の所へへばりついて書いたり、いろんなかっこうで勉強しているのを見ながら、隣のへやへ行って思いっきり泣いてしまいました。そして、人間の尊さ、求める心の尊さを思い、それを生かすことができないのは全く教師の力不足にすぎないのだ、ということがよくわかりました。

今指摘されている「個別最適化」そして「多様性」は何も目新しいことではありません。いつの間にか「効率よく」に慣らされてしまった私たち。学校が果たす使命は今も昔も、主役である子供たちといかに向き合うか、です。皆様と共に「誰もが安心して過ごせる学校」を進めていきます。